

## 春植さとうきびに対するCAT粒剤の除草効果について

浦崎 健一・下和田 和雄

(鹿児島県農業試験場熊本支場)

URASAKI, K., and SIMOWADA, K.

## The Effect of Weeding by Granular-simazine on the Spring Planted Sugarcane.

## はじめに

さとうきびに対する除草剤は、DCMUおよびCAT水和剤が普及に移されているが、水利の便が悪いことや使いにくいなどの理由から、広く農家に受け入れられてはいない。近年CAT粒剤が開発され、一部の作物では水和剤と同様な除草効果が認められているので、筆者らは春植さとうきびについてCAT粒剤の除草効果を検討した。

## 試験方法および経過

供試ほ場は黒色火山灰土。前作は緑肥大豆。さとうきびは1966年3月31日に植付け、4月6日の発芽始め時に薬剤を土壌全面に散布した。5月23日(48日目)に雑草調査を行ない、その後は各区とも完全手取り除草をし、標準管理栽培とした。試験区の構成は、第1表のとおりである。

第1表 試験区の構成

番号	区名	散布の方法
1	CAT粒剤10g区	手まき
2	CAT粒剤15g区	手まき
3	CAT水和剤10g区	水7lに溶かし噴霧器で散布
4	無散布無除草区	雑草調査時まで放任

注) ㄥ3が対象薬剤区

発芽は大体良好であったが、一節一芽苗を用いたため初期生育がやや遅れた。しかし中期以降はよい気象条件に恵まれ、順調な生育経過を示した。降雨が薬剤散布2日前に27.5mm、当日に7.5mm、3日目に1.3mm、4日目に83.0mmあり、5日目までに粒形はほとんど分解されたので、粒剤散布前後の気象条件としては理想的であったものとする。

## 試験結果および考察

生育調査の結果によって蔗茎の発消長をみると、無散布無除草区の最高分けつ期が他の区より約1ヶ月遅れているほかは、各区とも同一傾向を示した。

しかしCAT粒剤15g区が水和剤10g区に比較して、生育初期に茎の発生が少なく、全般的に茎数も減少した。茎の伸長は各区ともほとんど差がみられなかった。収穫調査の結果は第2表のとおりで、原料茎長および原料茎径は各区とも大差はみられない。しかし水和剤10g区に比較して粒剤15g区が、a当り原料茎数および原料茎重が9%、平均一茎重で13gいずれも少なくなっている。原料茎重については有意差は認められないが、この減収要因が薬害によるものかはつきりしないので、今後更に検討したい。

第2表 収穫調査

項目 区	原料 茎長	原料 茎径	a当り 原料茎数	a当り 原料茎重	同左 比率	平均 一茎重	ほ場 Drift
	(cm)	(cm)	(本)	(kg)			
1	173.9	2.3	1,592	911.9	100	573	16.5
2	172.9	2.2	1,461	828.8	91	567	16.9
3	170.6	2.3	1,572	912.3	100	580	17.6
4	168.8	2.2	1,506	872.4	96	579	17.3

雑草調査の結果は第3表のとおりで、各散布区は無散布無除草区に比較し、かなり高い除草効果を示している。散布区間では粒剤15g区が最も高く、次いで水和剤10g区、粒剤10g区の順となるが、その差は小さい。一方薬剤価格では粒剤が水和剤より約2倍高くなるが、散布が容易で散布時間が $\frac{1}{4}$ で出来るのでかなり省力化される。また粒剤は散布時の土壌水分が除草効果の発現に影響するが、一般に春植さとうきびの場合は、散布時期に降雨も適当にあるので散布条件がよく、水和剤と同程度の除草効果が期待出来るので、安定して使用出来るものと考えられる。

第3表 雑草調査 (m<sup>2</sup>当り)

項目 区	本数 (本)			重量 (g)				
	禾本科	その他	合計	比率	禾本科	その他	合計	比率
1	336	23	359	35	45.5	8.7	54.3	10
2	238	19	257	25	31.8	5.5	37.3	7
3	276	23	299	29	31.4	6.9	38.2	7
4	932	85	1,017	100	309.0	227.0	537.0	100